

真理とは何か？ - ナンバー・スリー

エマオへの道

Jeff Pippenger

2023-09-07

ヨハネによる福音書では、最後の晩餐の直後からイエスがゲツセマネの園へ行くまでの間に、第14章から第17章の終わりまでにわたって長い記述があります。次の記事でこれらの章を扱うつもりです。本稿は、それらの章の理解を築くための土台となるものです。キリストの歴史における改革の路線という観点からすると、これらの章に記されているキリストと弟子たちの対話は、凱旋入城の直後で、十字架の直前に位置しています。イエスはエルサレムに入城し、弟子たちと最後の食事をとり、その後にその記述が展開し、さらにゲツセマネへと向かい、その同じ日の真夜中に逮捕され、十字架刑へと至る七段階の過程が始まりました。彼と弟子たちは、預言的には、第七の月運動によって表される歴史の中で、エクセターの野営集会の直後で大失望の直前に位置づけられていました。最後の晩餐の直後に始まるその記述で、イエスが最初に語るのとは、次のとおりです：

あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。ヨハネ 14:1

大いなる失望がわずかに数時間先に迫っていると知って、イエスは来るべき危機に備えて弟子たちを強めようとされた。七つの雷鳴として象徴される出来事を構成する四つの道標の中にある隠れた預言の筋は、ヨハネの福音書の物語におけるこの三つの段階が展開する歴史である。その隠れた筋は、七つの雷鳴の中で、最初の失望から最後の失望に至る歴史を表している。

イエスが彼らに「あなたがたの心を騒がせてはならない」と告げる直前、イスカリオテのユダは三度目にして最後のサンヘドリンへ向かうため、食事の席を離れていた。彼がその三度目の会合のために席を立ったとき、彼の猶予期間は終わった。

七つの雷の象徴の中にある隠された線という文脈において、キリストの凱旋入城は、二種の礼拝者が現れる真夜中の叫びを表している。ヘブライ語の「真理」という語を構成する際に用いられる中間の文字という道標は、ヘブライ語アルファベットの第十三字である。十三は反逆を表し、預言的な道標としてそれは真夜中の叫びを指し示す。そこでは愚かな乙女たちが反逆の現れを示し、凱旋入城という道標におけるユダもまた同様である。

「昔も今も、そしてこれからもずっと、麦の中には毒麦があり、賢い乙女の間には愚かな乙女があり、灯火を持っていながら器に油のない者たちがいる。地上でキリストが築いた教会にも、貪欲なユダがいたし、その歴史のあらゆる段階においても、教会の中にはユダたちがいるだろう。」 Signs of the Times, 1879年10月23日。

ユダは金を返し、自分の裏切りをカイアファに、そしてキリストに告白し、その後、首をつりに行った。彼が法廷を去るとき、油を得ていなかったと気づいた愚かな乙女たちの窮地を表す、まさにその言葉を叫んだ。

ユダは自分の嘆願が無駄であったことを悟り、「もう遅い！もう遅い！」と叫びながら広間から駆け出した。彼は、イエスが十字架につけられるのを見るまで生きていけないと感じ、絶望のあまり外へ出て首を吊った。 *Desire of Ages*, 722.

ユダの「『もう遅すぎる！もう遅すぎる！』と叫びながら広間から駆け出した」という描写は、偽りの「真夜中の叫び」のメッセージを例証している。そのメッセージは常に二つの階級の礼拝者を明らかにし、そしてミラー派の歴史においてそうであったように、愚かな乙女たちは、真の「真夜中の叫び」のメッセージが到来した後も偽りのメッセージで活動続ける。こうして、ミラー派の歴史においては、ウィリアム・ミラーを指導者を選びながら、第三天使のメッセージを拒み、キリストに従って至聖所に入った小さき群れに反対する運動があった。

私の思いは、合図が与えられる未来へと運ばれた。「見よ、花婿が来る。迎えに出なさい」。しかし、幾人かは自分のともしびを補給するための油を手に入れるのを先延ばしにし、手遅れになって初めて、油によって象徴される品性は譲り渡すことができないのだと知るであろう。 *レビュー・アンド・ヘラルド*、1896年2月11日。

隠された歴史の第三の道標は裁きを表し、ヘブライ文字の最後の文字で表される。その文字は「Tav」で、書くと十字の形になる。十字は裁きを表す。

ミラー派の歴史における最初の失望から真夜中の叫びに至るまで、あるいはアルファという文字から第十三の文字に至るまでには、ある期間を表す道しるべがある。この期間は十人の乙女のたとえにおいて「遅延の時」として示されており、その遅延の時はハバクク書第二章にもある。真夜中の叫び、すなわち反逆の第十三の文字から、アルファベットの最後の文字に当たる大失望に至るまでにも期間があり、これは「第七の月運動」と呼ばれた。七か月続いたからではなく、真夜中の叫びのメッセージが、ユダヤ暦の第七の月の十日、すなわち贖罪日にキリストが来られると示したからである。

ヨハネによる福音書14章から18章にかけての叙述の背景は、ミラー派の歴史における「第七の月の運動」を象徴する時期に始まる。ヨハネによる福音書におけるこの叙述の主眼は、来たる十字架の危機（文字「タウ」）に備えるよう弟子たちを整えることである。それゆえキリストは、ご自身の死から御父のもとへ昇天し再び来られるまでの間が、弟子たちにとって悲しみと不確実さ、失望の時期となることを示される。改革の流れの証言に示されている最初のあらゆる失望の預言的特徴と同様に、その失望は、以前に啓示されていた重要な真理を軽視したことによってもたらされた状態を伴っている。キリストの十字架上の死は、かつて今も重要な真理であり、キリストはご自身が十字架につけられ復活することを弟子たちに直接告げておられた。しかし、その危機はあまりにも大きく、圧倒的であったため、彼らは覚えておくべきことを忘れてしまった。

イスラエルの希望であるキリストが十字架につけられ、ニコデモにそうなると告げられたとおりに高く上げられたとき、弟子たちの希望はイエスと共に死んだ。彼らにはそのことを説明することができなかった。彼らには、キリストが前もってそのことについて彼らに語っておられたすべてのことを理解することもできなかった。 *Faith and Works*, 63.

私たちが取り上げているヨハネによる福音書の四章にわたる叙述全体の主題は、イエスが弟子たちを、イエスが真夜中に逮捕されてから、御父のもとに昇られ、戻って来られるまでのあいだに彼らが経験する失望の期間に備えさせることでした。ヨハネのその四章では、キリストが弟子たちのもとを離れていたその期間は、待機の期間を象徴しています。歴史的には、私が待機の期間と呼んでいるその時期は、十字架の危機の後に生じました。しかし、これから考察するその四章は、十字架の大いなる失望の後ではなく、最初の失望から始まる待機の期間を預言的に象徴しています。

なぜ私は、キリストが弟子たちに備えさせておられた最後の失望が、キリストの改革の系譜における最初の失望、すなわちラザロの死を予表していたと示唆するのか。この問いは、七つの雷の隠された歴史に関連して今や封印が解かれつつある真理を支持する光のもとで、ヨハネによる福音書の四つの章にわたる記事を見ていくために、まず解決されなければならない。

キリストの歴史において、ラザロの死と復活の間の期間は、待機の時と一致する。その後、キリストは凱旋入城のためにエルサレムへ向かう。ヨハネ14章におけるキリストは、弟子たちに語っているが、それは、真夜中の叫びのメッセージが到来して待機の時がすでに終わり、そこから始まった、いわゆる第七の月の運動に当たる歴史の中でのことである。

ヘブライ語の「真理」という語が、七つの雷の象徴的な歴史から封印が解かれて明らかにされた隠された歴史の特定をどのように確認するのかを理解するには、ヨハネ福音書14章から17章で当時キリストが弟子たちに語っておられたメッセージを慎重に分析する必要がある。大失望の道しるべが最初の失望の道しるべを例証するために用いられている一例は、エマオ途上の弟子たちの経験に見ることができる。

ミラー派の歴史における「遅延の時期」を終わらせたのは、以前に失敗に終わった1843年の予測の訂正であった。サミュエル・スノーが、『大失望』で幕を閉じることになる「第七の月の運動」をもたらしたそのメッセージを練り上げていった過程は、エクセターのキャンプ集会に至るまでの彼の刊行物や公開講演をたどることで、歴史的に追跡することができる。靈感による注解は、その発展を、スノーの最終的なメッセージの単なる歴史的展開とは異なる仕方で扱っている。ホワイト夫人は、主がハバククの1843年の図表に記された数値の誤りから御手を取り除かれたときに、そのメッセージが認識されたのだと教えている。

私は、神の民が期待に満ちて喜びながら主を待ち望んでいるのを見た。だが神は、彼らを試みようとしておられた。預言の期間の算定にあった誤りを、神の御手が覆い隠しておられた。主を待ち望んでいた者たちはこの誤りを見いだせず、その時期に異議を唱えていた最も博学な人々もまたそれに気づかなかった。神は、ご自分の民が失望に遭うように取り計らわれたのである。期日が過ぎ、救い主を喜びの期待をもって待っていた者たちは悲しみ、落胆した。一方、イエスの現れを愛してはおらず、恐れからそのメッセージを受け入れていた者たちは、期待された時に主が来られなかったことを喜んだ。彼らの信仰の告白は心に及ばず、生活を清めることもなかった。期日の経過は、そのような心をあらわにするのにふさわしいものだった。彼らは、真に救い主の現れを愛していたがゆえに悲しみ失望している人々に、真っ先に背を向け、嘲っ

た。私は、神がご自分の民を試し、試練の時にたじろいで退く者を見分けるために厳しい吟味の試練を与えられたことのうちに、神の知恵を見た。

イエスと天のすべての軍勢は、魂の愛する方である彼をひと目見たいと甘美な期待をもって切望していた者たちを、憐れみと愛をもって見守っていた。天使たちが彼らの周囲にとどまり、試練の時に彼らを支えていた。天からの知らせを受けることを怠った者たちは暗闇に置き去りにされ、天から彼らに送られた光を受け取ろうとしなかったゆえに、神の怒りが彼らに対して燃え上がった。主がなぜ来られなかったのかを理解できず失望していた忠実な者たちは、暗闇のままにはされなかった。彼らは再び、預言の期間を調べるために聖書へと導かれた。主の御手がその数字から取り去られ、誤りが明らかにされた。彼らは、預言の期間が1844年にまで及ぶこと、そして、預言の期間が1843年に終わると示すために彼らが提示していた同じ証拠が、むしろそれらが1844年に終結することを証明していることを見いだした。神の御言葉からの光が彼らの立場を照らし、彼らは「たとえそれ（幻）が遅れても、それを待て」という遅れの時を見いだした。彼らはキリストが直ちに來られることへの愛のあまり、真に待ち望む者たちを明らかにするために意図されていた幻の遅れを見落としていた。彼らは再び、ある期日を得た。だが私は、多くの者がその激しい失望を乗り越えることができず、1843年に彼らの信仰を特徴づけていたほどの熱心さと活力を持つには至らないのを見た。

サタンとその天使たちは彼らに勝利を収め、メッセージを受け入れようとしなかった者たちは、それを自ら「惑わし」と呼び、受け入れなかったことを先見の明ある判断と知恵によるものだとして自賛した。彼らは、自分たちに対する神の勧告を退けていることに気づかず、天から与えられたメッセージを実践していた神の民を混乱させるために、サタンとその天使たちと手を結んで働いていた。

「このメッセージを信じる者たちは、教会で虐げられた。しばらくの間、このメッセージを受け入れない人々は、心の思いを行動に移すことを恐れによって抑えられていたが、期日が過ぎると、彼らの本心が明らかになった。彼らは、預言の期間が1844年まで延びていると、待ち望む者たちが負わざるをえないと感じていた証言を、黙らせようとした。信者たちは自分たちの誤りを明確に説明し、なぜ1844年に主を待ち望んだのか、その理由を示した。反対者たちは、提示された力強い論拠に対して何ら反論を持ち出すことができなかった。それでも教会の怒りは燃え上がり、彼らは証拠に耳を貸さず、その証言を教会から締め出されて、ほかの人々がそれを聞けないようにしようと決めた。神が彼らに与えた光を他の人々から隠しておくことをあえてしなかった者たちは、教会から締め出された。しかしイエスは彼らと共におられ、御顔の光のうちにあって彼らは喜んだ。彼らは第二の天使のメッセージを受け取る備えができていた。」『初期の著作』, 235-237.

先に述べた歴史は、ほかにも多くのことを含むが、その中に2020年7月18日の経験も含まれている。しかし私が考えてほしい要点は、エクセターのキャンプ集会でサミュエル・スノーによって与えられた「真夜中の叫び」のメッセージが示している理解は、スノーの歴史的業績によってではなく、主の御手の働きによって示されているという点である。主の御手は一つの誤りを覆っており、主がその御手を取り除かれたときに初めて、ミラー派は自分たちの失望を理解し、また自分たちが「遅延の時」と表される期間にいたのだ

と理解することができた。

主が御手を取り去られることは、エマオへ向かう途上にいた弟子たちの経験における重要な要素である。それは「遅延の時」として知られる期間の終わりを象徴し、「真夜中の叫び」のメッセージによって表される理解をもって終結する。だが、エマオの出来事が起こったのは十字架の後であり、それはラザロの死という最初の失望ではなく、大失望を表している。

すると、その同じ日に、彼らのうち二人がエマオという村へ向かって行った。そこはエルサレムからおよそ六十ファースの所にあった。彼らは起こった一切の出来事について互いに語り合っていた。彼らが語り合い、論じ合っていると、イエスご自身が近づいて、彼らと一緒に行かれた。だが、彼らの目は閉ざされていて、彼を認めることができなかった。そこでイエスは彼らに言われた。「歩きながら互いに語り合っているその話は、どんなことなのですか。なぜそんなに悲しそうなのですか。」ルカ 24:13-16

この箇所の“eyes”という語は、目という器官そのものよりも、見る力を表している。“holden”という語は、力を意味する。弟子たちは十字架の幻を理解できなかった。なぜなら、キリストが彼らの、十字架に関する預言的な幻を見る力を覆い隠しておられたからである。キリストの御手は、その力の象徴である。イエスが指摘された悲しみは、彼らの大きな失望を表していた。失望した弟子たちがさらに議論を重ねた後、キリストは語り始められた。

すると、彼は彼らに言われた。「ああ、愚かな者たちよ。預言者たちが語ったすべてのことを信じるのに、心の鈍い者たちよ。キリストは、これらのことに苦しみ、その後その栄光に入るべきではなかったのか。」そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書のすべてにわたり、ご自分に関することを彼らに説き明かされた。やがて、彼らが向かっていた村に近づくと、彼は、さらに先へ行こうとされるご様子であった。だが彼らは、「私たちと一緒に泊まりください。夕暮れになり、日はもう傾いていきますから」と言って、彼を強いて引きとめた。そこで彼は、彼らと共に泊まるために中に入られた。ルカによる福音書 24:25-29

イエスは、「歴史主義的」な聖書解釈法を用い、モーセ以来の預言の筋道を聖史に沿ってたどり、十字架の歴史を明らかにすることによって、弟子たちを教えられた。イエスは、いにしへの道と行に行を重ねる方法論を表す過去の預言史の筋道を用いて、失望していた弟子たちを教えられた。彼が彼らを残して先へ行くように見えたとき、彼らは彼を強いて引き止め、自分たちと共にとどまってくれるよう願った。彼らは遅れの際にあり、キリストは彼らの目から御手を取り去ろうとしておられた。その御手が取り去られると遅れの際の時は終わり、彼らが暗闇を駆け抜けてエルサレムへ戻り、十一人の弟子たちのもとへ急いだとき、彼らは真夜中の叫びのメッセージの伝達の速さを象徴していた。

そして、彼らと一緒に食卓についたとき、彼はパンを取り、祝福してそれを裂き、彼らに与えた。すると彼らの目が開かれ、彼らは彼を認めたが、彼は彼らの目の前から姿を消した。ルカによる福音書 24章31節。

イエスは、彼らが預言の幻を理解できないようにしていた御手を取り除かれ、そうされると、彼らは彼だとわかった。イエスは彼らに『真夜中の叫び』のメッセージをもたらし、彼らは食事をしながらそれを受け取った。というのも、すべてのメッセージは食べられなければならないからである。彼らはただちに、「地を覆う津波のように」十一人の弟子たちに告げに駆けていった。

そして彼らは互いに言った。「道すがら、あの方が私たちに語り、聖書を私たちに解き明かしてくださったとき、私たちの心は燃えていたではないか。」そして彼らはその時すぐに立ち上がってエルサレムに戻り、十一人と一緒にいた人々が集まっているのを見つけた。彼らは言った。「主はまことに復活され、シモンに現れた。」二人もまた、道中に起こったことと、パンを裂かれるときに彼だとわかった次第を語った。彼らがこう話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平安があるように」と言われた。ところが彼らは狼狽して恐れ、霊を見たのだと思った。すると彼は言われた。「なぜ取り乱しているのか。なぜ心に疑いが起こるのか。わたしの手と足を見なさい。確かにわたしだ。触って、見なさい。あなたがたが見ているとおり、霊には肉と骨はないが、わたしにはある。」こう言って、彼は彼らに自分の手と足を示された。彼らが喜びのあまりなお信じられず、不思議に思っていると、彼は言われた。「ここに何か食べ物があるか。」彼らは焼いた魚の一切れと蜂蜜の巣を差し出した。彼はそれを取り、彼らの前で食べた。それから彼は言われた。「これこそ、わたしがあなたがたと共にいたときに語った言葉である。すなわち、モーセの律法と預言者たちと詩篇に、わたしについて書いてあるすべてのことは、必ず成就しなければならないということだ。」それから彼は彼らの悟りを開き、聖書がわかるようにされた。ルカによる福音書 24:32-45。

エマオへ向かう道で出会った弟子たちの場合と同じように、イエスは、聖書に記された過去の聖なる歴史を用いてご自身の死と復活の歴史を説明するメッセージを提示し、食事をしてみせることによってそれをなされた。神の民はそのメッセージを食べなければならない。彼らの不安と悲しみのただ中で、イエスは、過去の聖なる歴史が一行一行積み重ねられて結び合わされたことに基づく現在の真理のメッセージに対する理解を彼らに開くことによって、ご自身の死から復活・昇天・再臨に至るまでに生じた待機の時を終わらせた。

したがって、エマオへ向かう途上の二人の弟子（真夜中の叫びのメッセージが加わって力を受ける第二の天使を表している）は、十字架の後に続いた待機の時を、真夜中の叫びに先立つ待機の時と見なす。したがって、弟子たちの失望は、預言的な系列における最初の失望を表しており、大失望ではない。

エマオの物語は、失望していた十一人の弟子たちにも繰り返される。イエスは彼らに加わり、「歴史主義」という方法論を通して預言のことばの成就を教え、食事をしながら彼らの理解を開かれる。物語の始まりは、その結末を指し示している。ついでイエスは、十字架の失望が最初の失望に預言的に適用できるという事実に対する第三の証しを示される。さらに、上からの力を受けるまでエルサレムにとどまるようにと彼らに告げることで、この歴史の構造に対する第三の証しを与えられる。

そして彼らに言われた。「こう書いてある。キリストは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活すべきである。また、罪の赦しに至る悔い改めが、その名によって、エルサレムから始めて、すべての国々に宣べ伝えられるべきである。あなたがたはこれらのことの証人である。見よ、わたしはわたしの父の約束をあなたがたの上にする。だから、いと高きところからの力を着せられるまで、エルサレムの都にとどまっていなさい。」そして彼らをベタニアのあたりまで連れ出し、手を上げて彼らを祝福された。祝福しておられるうちに、彼らから離れ、天に上げられた。彼らは彼を礼拝し、大いなる喜びをもってエルサレムに帰り、いつも宮にいて、神をほめたたえ、賛美していた。アーメン。ルカによる福音書 24:46-53。

エマオへ向かう途上の弟子たちの出来事は、主の死に始まり、主が復活して御父のもとへ昇られるまで続く「待機の時」を示している。エマオの弟子たちにとってその待機の時が終わったのは、過去の聖なる歴史の筋道を行に行を重ねるように結び合わせるという方法によって、十字架の出来事に関するメッセージが確立されたときであった。すると弟子たちは、そのメッセージを可能な限りの速さで伝えに走った。続いてイエスは十一人の弟子たちと会われ、ここでも食事の場面が言及され、メッセージを証明するために行に行を重ねる方法が用いられ、エマオの弟子たちのときと同様に彼らの理解を開いてから去られた。ただし、五旬節に聖霊が到来して待機の時が終わるまで、エルサレムで待つという歴史を示されてからである。

イエスが弟子たちにエルサレムにとどまるよう命じられたとき、それはエマオ途上の物語の結末であった。物語のはじまりは失望を表し、その後に待機の時が続く、さらに「真夜中の叫び」のメッセージを表す真理の啓示が続いた。その真理の啓示は、キリストが弟子たちの目を覆っていた御手を取り除かれたときに成就した。それが物語の始まりであり、そして中盤には、キリストがご自身を現し、御言葉の悟りを開いて十一人の弟子たちの失望を取り除かれたときに、同じ筋立てが繰り返された。さらに最後に、大失望ではなく最初の失望から始まる同一の預言的構造の最後の証しがある。

エマオからペンテコステに至る歴史は、第一次の失望、待機の時、そして真夜中の叫びに関する三つの証しを与えている。ところが、その三つの証しそれぞれの冒頭に道標として置かれている実際の失望は、第一次ではなく第二次の失望であった。ミラー派の歴史における道標である大失望が、ミラー派の歴史における第一次の失望を例証するために用いられているのだと認識することは、最後の晩餐での食事とゲツセマネの園での真夜中の逮捕とのあいだに起こった出来事を記す、ヨハネ福音書の四つの章に見いだされる叙述を理解するうえで不可欠である。さらに、イエスが十一人の弟子たちに現れて彼らと共に食事をされたとき、こう尋ねられたことにも留意すべきである。「なぜあなたがたはうろたえているのか。なぜあなたがたの心に思いが起こるのか。」

ヨハネの福音書で最後の晩餐をとられた直後、これから取り上げる箇所は、キリストが彼らに「心を騒がせてはならない」と告げる言葉で始まる。ところが五日もしないうちに、彼らはその命令を忘れてしまった。ヨハネの福音書第14章から第17章は、2020年7月18日の第一の失望を表し、それが待ちの時を招き、恩恵期間が閉じる直前に封印が解かれるイエス・キリストの黙示へと導き、そして真夜中の叫びのメッセージを表している。そのメッセージは、第七の月の運動によって型示されてきた期間を到来させ、また、真夜

中にエマオの弟子たちがエルサレムへと駆け戻ったことによっても型示されている。その歴史こそ、キリストがご自身を「真理」として表すために用いた三つのヘブライ文字によって表されているものである。

ヨハネによる福音書のこれら四章の記述の中にこそ、私たちは、聖霊の働きがその御言葉そのものと同じ歩みとして示されているのを見いだすだけでなく、8月12日から17日にかけて行われているエクセターのキャンプ集会において、真夜中の叫びのメッセージの最終的成就が現在、段階的に示されつつあるという今なされている主張を裏づける最良の証拠も見いだすのである。メッセージがついに待ち望む聖徒たちに認められるとき、その使者たちが「終わりの日々」の最後の警告のメッセージを死にゆく世界へ携えて行くとともに、世界は日曜法の危機へと突入するだろう。